

当院におけるこれまでのPELDの経験と今後の展望

A summary of previous PELD experience in our hospital and the future

古閑 比佐志¹、稲波 弘彦²

¹岩井整形外科内科病院、²稲波脊椎・関節病院

当院では2009年よりPELDを実施してきたが神経損傷や予期せぬ術中出血などが生じたことから一時中断していた。しかし患者サイドからの強い要請もあり各症例を吟味しつつ2013年9月よりPELDを再開している。再開後これまで167例にPELDを行ったが、術後経過は概ね良好である。167例の内訳は、感染1例、外測陥凹狭窄2例、Annuloplasty 5例、他はすべて腰椎椎間板ヘルニアである。腰椎椎間板ヘルニアのうち33例は外側及び椎間孔ヘルニアで posterolateral approach を行った。残りの124例は脊柱管内のヘルニアで、57例の transforaminal approach と67例の Interlaminar approach である。椎間板ヘルニアに関しては、これまでは極力ドリルを使用しないで椎間板に到達可能な症例を選択し行ってきたが、今後はドリルやケリソンを使用しなければ椎間板に到達不可能な症例にも適応を広げて行く予定である。またPELD後の再発ヘルニアに対しても、これまで2例PELDで再手術を行い良好に経過している。今後は再発例に対するPELDも増えてくることが予測される。外測陥凹狭窄はまだ症例数が少ないが術後経過は良く、非常に良い適応であると考えているので、今後はPELDで積極的に治療していく予定である。更にオープンサージェリー後の隣接椎間障害や再発などにも良い適応症例があるので、今後はそのような症例も積極的に行っていく予定である。本口演では各症例も提示しながら、これまで及び今後のPELDの適応疾患に関する当院の方針を解説する。